

第9回高校生カンボジアスタディツアー ニュースレター

宮城県気仙沼高等学校

Rio S.

【今回のツアーに興味を持ったきっかけ】

私は発展途上国の医療の現状に強い関心を抱いています。特に、世界遺産アンコールワットで知られるカンボジアでは、観光地としての魅力の一方で生活環境に課題が多く、それに伴って健康問題が深刻化していると知りました。日本とは異なる気候や生活環境から引き起こされる病気、さらに医療の未発達や薬の供給不足、宗教や経済格差による医療格差といった問題を理解することは、将来薬剤師を目指す私にとって大きな学びになると感じました。特に薬に関しては、輸入の障壁や財政問題などが現地の人々の健康を左右する現実があり、その背景を深く知りたいと考えています。そして、こうした医療問題の根本には教育の不足があるのではないかと考え、医療と教育の関係性や、発展途上国の医療問題に強い関心を持つようになりました。このツアーでは、実際にさまざまな場所へ訪問させていただき学べるがたくさんありました。その中でもわたしが、特に心に残った伝えたいことをニュースレターという形で紹介させていただきます。

【カンボジア日本国大使館】

まず、カンボジア日本国大使館に訪問した時のお話をさせていただきます。大使館では、カンボジアが抱える課題や、外交関係、日本からの支援についてとても詳しく伺いました。特に印象に残ったのは日本によるカンボジアへの教育支援についてのお話です。1975年から1979年にかけて起こった波尔・ポト政権の影響でカンボジアは教育がとても遅れているという現状があります。日本はUNESCO（国際連合教育科学文化機関）を中心に今回のツアーでも訪問させていただいた寺子屋をはじめ、カンボジアの教育に大きく貢献しているということを改めてお聞きすることができました。私はこのように自国の強みを他国の発展に生かすという姿勢が国際協力のあるべき姿なのだと感じました。またこれから平和な社会、大きくは世界への第一歩へと繋がると感じました。



大使や書記官の方の話をメモする様子



植野大使（後列真ん中）と記念写真

【トゥール・スレン虐殺博物館（S-21）】

次にトゥール・スレン虐殺博物館（S-21）訪問時のお話をします。ここは、大使館の話の際にも触れたポル・ポト政権時代（クメール・ルージュ）の際に実際に収容所として使用されていた場所でした。現在のカンボジアはとても教育に前向きな国と言えますが、この時代は教師や医師などの知識人が主に処刑されていたそうです。この施設も元は学校だったそうです。この博物館には実際に 12,000～20,000 の人の人々が収容されていたそうです。生存者はわずか 12 名だったそうで、1 人の男性は自身の体験談を本にして博物館内で売っていたのもみました。男性の本には S-21 での日々は奴隷のような生活であり、裁判機能は停止しありとあらゆる理由で罰せられ拷問を受けたと書かれていました。わたしは実際に見て、両親や祖父母が生きていた時にこのようなことがあったということがなかなか信じられませんでした。虐殺については歴史などで学びある程度理解していましたが、実際に見るととても辛くショックが大きかったです。このような辛いことはあってはいけないと強く思い、平和はどの国においてもとても大切だと改めて実感することができました。



トゥール・スレン虐殺博物館にある慰霊碑



わずかな生存者の写真

【アンコール小児病院】

最後にアンコール小児病院を訪問した時のお話をさせていただきます。私は、病院内の設備などを見学させていただきました。この病院はカンボジア国内においても高い医療水準をもつ病院で、小児内科はもちろん、外科、眼科、歯科もありました。またお産後のお母さんのケアや、衛生指導なども行なっていました。この病院は主に難病の治療に重点を置いていて、医師や看護師の教育にもとても力を入れていました。しかし、その背景では人材育成に多額の投資をしているため寄付が必要になってくることがや、また国の財政も底をつきかけてしまっているため貧困層には無料で診察していたものが無料ではなくなってしまうなど、やはり財政の面で溝ができてしまっていました。「受診している患者さんは眼科患者が多く、もっと増やしたいが拡大するお金がない」と担当の方はおっしゃっていました。国立も改善されているとはいえ、やはり日本の病院とは大きなギャップがありました。また、性犯罪による患者も減ってはきているもののまだいるという現状があるそうです。このことから、カンボジアでの医療はとても普及しているものの、貧困層からするとまだ手の届きにくいものであると感じ、平等という言葉を改めて深く考えさせられる訪問でした。



病院内の様子



待合室。ここで仮眠をとる人もいる。

【帰国後感じたこと】

わたしは今回のツアーで、カンボジアの教育、歴史、医療などをさまざまな場所を訪問し、お話を聞くことで知ることができました。ツアーではさまざまな方々と交流し、お話を伺ったりして文献やインターネットの情報だけでは学ぶことができなかった現状を自分の目と肌で感じて知ることができました。ニュースレターでは、たくさんの経験の中でも特に印象深かった教育、医療、歴史についてお話しさせていただきました。最後にお話しさせていただいたアンコール小児病院で感じた「平等」について帰国した今でも考え続けています。わたしはこの経験を生かして、SDGsにもある「平等」をあらためて見つめ直し、自分なりの「平等」を見つけ、誰にでも平等で格差のない医療を作り出したいと思いました。そしてニュースレター以外でもカンボジアという国について今回のツアーで学んだことを自分なりの言葉でたくさんの人に伝えて発信し続けていきたいと思っています。

最後に、今回のツアーを支えてくださった皆さん、カンボジアでの素敵な学び、思い出をくださった現地のみなさんに感謝を伝えたいです。このような学びの機会を与えてくださり、本当にありがとうございました。



アプサラダンスの踊り子さんと記念写真